

ルドルフ・フォン・ラバン 「舞踊のコンポジションと記譜舞踊」¹⁾

Rudolf von Laban, « Tanzkomposition und Schrifttanz » (1928)

記譜舞踊が舞踊作り古来の本質を脅かすといった危惧が、世間に囁かれている。当然、アマチュアの舞踊制作の幾ばくかにおいてはそうかも知れないが、それらはまさに舞踊の芸術的営為から我々が意識的に除外したいものだ。感傷や知に偏った作り物は、この芸術のさらなる発展の大きな危険となる。いずれも徹底的に彫琢された舞踊のコンポジションが生み出され、踊り手と公衆の感性が舞踊の本質言語に目を開かれたあかつきには、もはや存在することさえできないだろう。つまり先の見込みはないのである。そしてそのような状況をもたらしうるのは、記譜舞踊だけなのだ！

さてここで、実際の舞踊創作は記譜された舞踊作品があればどうなるのかという疑問がおこる。答えは至って簡単！ 舞踊を着想し拡充するという根本は何ら変わらない。ダンサーもまたその他のあらゆる芸術家と同様に、自らの内なる生動をかきたてる着想を分かち合いたいという希望を持っている。ただそれは、言葉や彫塑や絵画ではなく、ダンサーに固有の素材、つまりソロあるいは集団の身体運動において生起するだけなのだ。その動きは時間リズムと空間リズムを基本要素とし、両リズムは一定の手段で整理されればその体験を表現する。これまでもあらゆるダンサーが自らの着想を整理し構成する際、反復練習を通してこのリズムを定着しようと試みてきた。少し生産的でありさえすれば、ほとんどの者が自分でこの配置を忘れぬよう書き留めねばならないということになる。こうしてコースを図形で書き留める者あり、リズムをメモする者あり、自分が踊る中で起こる出来事（パントマイム）の内容を言葉で書き記す者ありといった具合である。音楽の記譜が着想の展開と配置を「思い出させる」こともしばしばある。たゆまぬ彫琢を通して、このような創造過程の多かれ少なかれ簡潔にして明瞭な抜粋が、ダンスの完成形へと定まってゆく。それは今後も変わるものではないが、ただ周到に考え抜かれた運動譜は、最終仕上げにおける精緻化の作業を可能にし、その成果を決定的なかたちで概観できるように保存する優れた基盤を提供する。細部と全体の様式いずれ

の点でも、舞踊の創作者は自分の産物の全体像を眼前に思い浮かべられるようになり、不明瞭さや様式を損なう要素の類が指摘される箇所と理由を把握できるようになる。時に超絶技巧を備えた身体に由来する着想が流れを邪魔することがあるが、作舞家はそれを容易に見つけ出し単純化できる。あるいは全く逆で、身体が格別な緊迫感の見事な盛り上りを生みだすはずであるところを、実際には生みだされた緩急を怠惰で不器用に変換するといったことが起こる。ここでも、正しい尺度と正しい形態—即ち舞踊家の「ひらめき」にふさわしい形態が見つけれられたなら、演じる踊り手はこの形態を満たせるようになるまで身体を鍛え上げねばならない。したがって上演や再演を行うダンサーにとっても、記譜舞踊のコンポジションは自らの能力と性質を鼓舞し制御する手段となるが、それは洗練された舞踊芸術が欠くべからざるものである。

しかしながらコンビネーションの可能性や記譜舞踊によるコンポジションのいろはを知らない舞踊家は、混乱を引き起こして舞踊芸術の普遍的評価を促すどころか台無しにすることで自らの舞踊の試みが残ったにすぎない能なしであり続ける。これはいわゆる成功というものを収めた舞踊家にさえあてはまる。というのも遅かれ早かれ、このような感情露出の空虚さと偏りが露呈し、見込みのない素人の失敗以上に芸術全体の信用をおとしめることになるからだ。

記譜舞踊というものは常に発展途上である。何らかの伝統に拠って立つものはすべて、多かれ少なかれ書いて残されている。イタリアとフランスのバレエ作品におけるバレエ様式の定型表現は、不自由で制約もあり身体に貼り付いて残ったものでもあるが、間違いなく記譜舞踊とみなされる。いわゆるノイエタンツも多かれ少なかれ意識的にギリシャ（ダンカン）あるいはオリエンタル（セント＝デニス、セント＝マエサ、ヴィグマンと一部のロシア・バレエ）の身体運動の伝統に根ざす形態を含んでいるが、これらも同様に一方からの記譜舞踊である。彼女らの場合、人工的に手入れされたというよりは自然

1) [訳注] 初出：Schrifttanz. Eine Vierteljahresschrift. hrsg. der deutschen Gesellschaft für Schrifttanz. 1. Jg. Oktober. Universal-Edition 1928. S. 19–20. 翻訳に際しては以下を底本とした。Schrifttanz. Eine Vierteljahresschrift. Schriftleitung Alfred Schlee. Mit einem Nachwort zum Neudruck von Gunhild Oberzaucher-Schüller. Hildesheim, Zürich, New York: Georg Olms 1991.

に近い身体性の基本形態が関係している。それらの舞踊は古来のバレエの本質のバロック的様式化よりも多少は豊かになり、したがってノイエタンツに一步近づいている。けれども新しい記譜舞踊は、動きのあらゆる組み合わせのなにがしかの可能性を、舞踊表現の素材として利用できるようにすることで、これらすべての伝統からの解放をもたらすだろう。そこに至る道は闊いである。そ

れでも喜ばしいことに、誠実な舞踊家が総じてこの手段の価値を認識しているというのは事実であり、しかもそれは彼らの歴史的な様式の組み合わせをただ書き留めておくために求められているのだ。彼らのうち何人かは徐々に自由なコンポジションに到達し、そうして初めて記譜舞踊の価値と意義は実現されるのだ。

(訳：古後奈緒子)